

17 世紀後半に、ニュートン¹⁾・ライプニッツ²⁾らにより独立に微分積分学が創設されて以来、多くの数学者がその研究を行ってきた。その中でもオイラー³⁾の業績は素晴らしく、200 年以上経った現在でも色褪せることなく輝いている。しかし、極限に関する議論が曖昧なところもあり、そのことを問題視する数学者が現れるようになった。そうした風潮の中で、19 世紀半ば頃に、フランスの数学者コーシー⁴⁾やドイツの数学者ワイエルシュトラス⁵⁾らによって ε - δ 論法が導入され、洗練されていった。

参考文献。

[1] 高木貞治，近世数学史談，岩波書店。

¹⁾ Isaac Newton (1643–1727)

²⁾ Gottfried Wilhelm Leibniz (1646–1716)

³⁾ Leonhard Euler (1707–1783): スイスの数学者。

⁴⁾ Augustin Louis Cauchy (1789–1857)

⁵⁾ Karl Theodor Wilhelm Weierstra (1815–1897)